高垣眸作品を読む（一）
――『怪奇黒猫組』――

藤沢　毅

尾道出身の作家・高垣眸の作品を読んでいこうと思う。最初に採り上げてみたのは、『怪奇黒猫組』。この作品は、昭和二十八年（一九五三）、ポプラ社より刊行された。[1] まずはあらすじを紹介しよう（後に問題としたい事項を太線とした）。

切支丹の妖術を使う黒猫組が、城から軍用金と宝剣霧降丸（きりふりまる）、「隠形の秘巻」を盗む。その際に香月（かつき）三左衛門、その子右馬之助（うまのすけ）は斬り殺される。祖父と父の敵を討つため、千代太郎が旅立つ。返り討ちになるところを、老仙・雲霧仁左衛門が救う。陽炎の銀二郎と木鼠の忠市は、駒形の関所から遠眼鏡を盗み取る黒猫組を目撃し、その遠眼鏡を奪うがすぐに奪い返される。千光寺の小坊主・曼念は相撲で勇力を顕し、友人の鳥刺しの竿作とともに、銀二郎、忠市と知り合う。黒猫組によって千光寺から黄金の本尊仏が盗まれる。千代太郎は仙界で修行、雲霧より「飛剣」を与えられ、同じく「無増無減球」という鉄丸を与えられた菊童とともに山を下りる。黒猫組の手下に襲われるも飛剣と鉄丸によって逃れた二人は、やはり黒猫組に捕まっていた少年・河童の皿吉を救い出す。鋤柄宿（すきがらじゅく）の大秋市で南蛮手品を興業する天々斎天瑪理（てんてんさいてんまり）を黒猫組が襲う。天瑪裡は北極星の生まれ変わり、千代太郎、菊童、皿吉、銀二郎、忠市、曼念、竿作は北斗七星の生まれ変わりであり、天縁の八人が揃うことで、黒猫組頭領の黒猫九郎兵衛

（畔柳（くろやなぎ）九郎右衛門）に対抗できるのであった。九郎兵衛の隠れ家である庵織山（いおはたやま）の鬼の洞穴に乗り込む八人。雲霧の援助もあり、苦難の末、黒猫組を全滅させる。

一　「転生そして集結」の系統

『怪奇黒猫組』の特徴の一つに、善の側に位置する少年少女たちが、北極星と北斗七星の生まれ変わりであることが挙げられる。生まれ変わり――前世からの転生――があり、前世からの仲間が集い共闘するという物語の型は、江戸時代、「水滸伝」が日本に受け入れられてから、現代に至るまで好んで用いられたものである。このことを確認してみよう。

「水滸伝」の場合は以下の図のようになる。

（人間界へ転生）
一〇八の魔星　→　一〇八人の豪傑
集結　共闘（叛乱）

「水滸伝」は、江戸時代の日本人に好んで読まれ、「翻案」（筋立てを借り、舞台や登場人物を別のものに換えたもの）という手法によって読本、実録、草双紙などのジャンルに取り入れられることになる。例えば、読本『南総里見八犬伝』では、

（転生）
伏姫と八房の犬との相気感応　→　八人の犬士
集結　共闘（忠義）

『南総里見八犬伝』の場合、前世からの転生というのではなく、伏姫と八房の犬との相気感応によって生まれた子が、転生のような形で生まれてくるのだが、因果で結ばれた仲間が集うという点は、持っている玉（それぞれ、仁、義、礼、智、忠、信、孝、悌の玉。役の行者より伏姫に与えられた数珠の玉を元とする）や牡丹の花の形の痣（八房の体の斑）によって強調される。また、里見家の家臣として集ってくるという形は、浜田啓介氏によって「家臣捃拾譚（くんしゅうたん）」と名付けられた[2]、新しい日本的な形である。

家臣捃拾譚ではなく、かつまた、北極星が関連しているという点で、『怪奇黒猫組』と近いのが、読本『浪華侠夫伝』である。

この話では、天界で罪を犯し、人間界に追放された五星が侠客として生まれ、敵討ちの幇助など悪を

懲らす善行をなし、最後は赦されて天界に戻るという枠組みを持つ。「竹取物語」のような贖罪譚としての要素も兼ねた形だと言えよう。

北極星 → 喧嘩屋五郎兵衛

五星 → 朝比奈藤兵衛
根津四郎右衛門
船越重右衛門
黒船忠右衛門
鐘の太兵衛

天界で罪を犯し、人間界に堕とされる。

さて、それでは『怪奇黒猫組』を見てみよう。悪の存在である黒猫組を倒す役割を持つ少年少女とは、次の八人である。

（転生）（天縁の八人）

北極星 → 天々斎天瑪理

北斗七星 → 千代太郎
菊童
陽炎の銀二郎
木鼠の忠市
曼念
鳥刺しの竿作
河童小僧の皿吉

この八人の前世について語り明かすのは、老仙・雲霧仁左衛門である。読者に対し、初めてこのことが示されるのは、仁左右衛門が千代太郎と菊童に言う次の台詞である。

「ふたりの前生（ぜんしょう）の身分は北斗七星じゃ。すなわち、そなたたちのほかに、もう五人の、一芸一能にすぐれた前生の兄弟がいるのじゃ。この五人にめぐり会い、さらに、北極星と一つになり、前生の天縁（てんえん）で結ばれた八人がそろった時こそ、どのような事業もなしとげられるのじゃ…」（第十二回）

「…その兄弟の印（しるし）というのは、一人ひとりの左の掌（てのひら）に黒い星の形の黒子（ほくろ）がある…」（同）

「…もうひとりの北極星、これは、右の手の甲に、赤い星形のあざがある…」（同）

なぜ「前生の天縁で結ばれた八人」が揃えば大きな力が発揮できるのか、それについてはその後も全く説明がなされず、不満が残る箇所である。一方、「兄弟の印」として星の形の黒子（北極星の化身は赤い星形の痣）があるというのは、『南総里見八犬伝』における牡丹の痣の型を受け継いでいるものと言えよう。

ここで、こうした複数の仲間が終結する型の魅力について考えてみよう。一つには、読者にとって前世からの因縁で結ばれている仲間がいるという幻想は、現世に不満を持つことへ対して慰めとなろう。自分の今ある姿は仮のもので、自分のことを分かってくれる仲間がどこかにいる、という考えは現実逃避ではあるが、だからこそ甘美なものでもある。とはいえ、読者の多くは幻想を幻想として捉えている。

もう一つには、複数の同列の登場人物がいることによって、読者は自然にそれを比べるという行為をすることになる。例えば、現代の漫画で同様の例を思い浮かべてみよう。あるいは、芸能界のアイドルグループでもよい。一人一人であったら、たいしたことない顔立ち、歌唱力の芸能人が、グループの中にいることによって、比較され、いつの間にかファンを持つことになる。これは、自分自身で比較しているだけではなく、周囲の人間の好みを計りながら、自分の好みと合わせ考え、あえて個性的な部分に目を向け、自分の好みと思いこむという現象が起きているのではないか。

また、一人の登場人物では一人分の性格、行動しかとれないが、複数の登場人物が同列に位置されることによって、さまざまなキャラクターが助け合って動き出すことになる。『怪奇黒猫組』で、それぞれのキャラクター設定を見てみよう。

天々斎天瑪理…南蛮手品小屋の太夫。吹き針を使う。
千代太郎…「敵討ち」譚の主役（討ち手）。
「飛剣（ひけん）」を使う。
菊童…仙童。雲霧仁左衛門に仕えていた。
「弾（はじ）き丸（だま）（無増無減球）」を使う。
陽炎の銀二郎…関所破りの少年。
木鼠の忠市…木登りの名人。猿の赤（あか）ン兵（べ）エを連れる。
曼念…千光寺の小坊主。怪力の持ち主。[3]
鳥刺しの竿作…竹竿で「蜂の巣突き」を使う。
河童小僧の皿吉…水泳の達人。

こうした設定を踏まえ、各人物の書き分けを見ると、いわゆる「キャラクターがかぶっている」ということがないことはわかる。複数キャラクターを使用する際の第一の課題はこれであり、キャラクター分けができず、あるいはキャラクター設定が徹底せず、崩壊する娯楽小説もあるが、これはそうではない。しかし、それぞれの個性を均等に書き分けられ

ているかというと、どうも怪しい。まず、中心たる北極星の化身・天瑪理が、なぜ中心であるのかがはっきりしない。敵討ちの枠組みを作っていることから、千代太郎はある意味中心的存在（千代太郎の視点から書かれることが多い）ともなっているが、彼と菊童のみが雲霧仁左衛門から教えを受けるという形であり、不思議な力（飛剣、弾き丸）を使えるのもこの二人のみである。陽炎の銀二郎にいたっては、個性に乏しく、そもそもなぜ「陽炎」なのかも明確にされていない。他の四人については、それぞれ特技を生かした見せ場は一応示されているので、この四人のみのバランスは良いが、そうすると僅かな特技のある仲間が集まって共闘するという、現実的ではあるが、どこが「どのような事業もなしとげられる」ほどの存在になるのか、まったく理解できない。要するに、「水滸伝」からの流れを真似したまでは良かったが、八人が揃うことによって大きな力が生じる、という設定は生かされず、勇み足に終わったのである。とはいえ、この日本人に愛好される転生と集結・共闘という流れを踏まえ、正義感を持つ少年少女（おそらく、想定読者と同年齢と考えてよいだろう）が、それぞれの個性を生かしながら協力し、妖術を持つ悪に対抗し、最終的に打ち勝つという構図は、当時の児童文学史を踏まえながら、評価できるか検討する価値があるだろう。

二　黒猫九郎兵衛

『怪奇黒猫組』の敵役（悪役）に相当するのは、作品のタイトルにもなっている黒猫組の首領・黒猫九郎兵衛である。文章中でこの九郎兵衛について解説するのは、善側の神仙・雲霧仁左衛門である。仁左衛門は次のように言う。

「…もとは、伊賀の忍術（しのび）者の名人で、畔柳（くろやなぎ）九郎右衛門という者じゃ。忍術（しのび）ばかりか、剣法にもすぐれた上、さきに、葛生の城の宝蔵から盗み出した秘書を読んで、天竺の婆羅門（バラモン）から伝わった、波羅蜜多（ハラミタ）の呪法まで身につけてしまいおった…」（第十二回）

九郎兵衛こと畔柳九郎右衛門を伊賀忍者という設定にしている。「忍者」「忍術」というと、現代では

忍び装束に身をつつみ、手裏剣を投げ、あるいは印を結んで術を使い、戦うというイメージが強い。しかし、江戸時代までの忍者のイメージは、一つには通俗軍書など戦国時代の合戦を描く中に現れる、いわゆる諜報活動を行うもの、もう一つは、術として隠形をなし、悪事を働くという形である。後者は妖術と合体して、変身したり、巨大な動物や昆虫を現出させたりするものも登場する。それでも「戦う」というものはあまりなく、武術と忍術を絡めて戦うというのは少なくとも幕末からなのではないか。

それでは、九郎兵衛の忍術と、また「婆羅門」伝来の「波羅蜜多の呪法」はどのようなものであったのか。

第一回「雨夜のお堀ばた」で、九郎兵衛の率いる黒猫組は、葛尾の城の宝蔵よりお家の重宝と軍用金（千両箱三箱）を盗み出す。堀を泳ぎ渡ったところで、北辰一刀流の達人である香月三左衛門（千代太郎の祖父）に見咎められ、戦いとなる。黒猫組の配下の者たちは三左衛門の腕に刃がたたないが、九郎兵衛のみは剣術だけでもそれに引けをとらない。高齢でもあり、余裕のなくなった三左衛門が先に斬りかかり、その刃は確かに九郎兵衛の太股を斬り裂いたが、三左衛門は斬り殺されてしまう。ここでの九郎兵衛は忍術らしきものを一切使用していないようだ。

ところが、その後の報告では、これ以前に宿直頭の香月右馬之助（千代太郎の父）も剣術によって斬られていたが、その他の番士たちが黒猫組を取り囲んだところ、以下のような術を使ったことになっている。

「…頭分（かしらぶん）の曲者が、たちまち、奇妙な呪文を唱え、十字の印（いん）をきるやいなや、曲者どもは、たちまち犢（こうし）ほどの大黒猫や、河獺（かわうそ）、または五位鷺（さぎ）のような奇怪な鳥獣のすがたに変化（へんげ）をなし、暗（やみ）のなかにすわれるように消えうせもうした。まさしく、切支丹（キリシタン）の妖術をつかう、近ごろ世間にうわさの高い、黒猫組の一味に相違ござらぬぞ」（第一回）

つまり、以前より九郎兵衛は「切支丹の妖術」を使うとの評判があり、そして、呪文を唱えることによって、自分自身だけでなく配下の者をも鳥獣の姿に変えるという「妖術」を身につけていたことになる。一方、前述のように、第十二回において、雲霧

仁左衛門が九郎兵衛について語る際には、「葛生の城の宝蔵から盗み出した秘書を読んで、天竺の婆羅門から伝わった、波羅蜜多の呪法まで身につけてしまいおった」とある。素直に読めば、宝蔵に忍びこんだ際には「切支丹の妖術」としての変化の術を身につけており、その際に盗み取った秘書により「婆羅門」伝来の「波羅蜜多の呪法」までも身につけたことになる。あるいは、九郎兵衛としては伊賀の忍術として変化の術を使っていたが、世間一般からはそれを「切支丹の妖術」として認識されていたということも考えられる。しかし、いずれにしても、物語の展開からすると、成功していない。変化の術が宝蔵から秘書を盗む以前より修得していたものだとすると、今度は秘書によって修得した術がどのようなものだったかがはっきりしなくなる。つまりは、宝蔵から盗み取る場面では、妖術を使用させるべきではなく、あくまでもこの時盗み取った秘書により、妖術を身につけることになったとするか、または最初から秘書云々を書かず、以前から修得していた変化の術（別の機会に修得した「婆羅門」伝来の「波羅蜜多」の術でよい）を使ったとした方がよかったのだ。実際、以下の場面では「婆羅門」伝来の「波羅蜜多」の術とばかり述べられ、「切支丹の妖術」は一切登場しない。

第四回「雲霧仙人」において、九郎兵衛は次のように描写される。

だが、もっとも特長のあるのは、この男の両眼（りょうがん）でした。いつもは、ほそく半眼（はんがん）にとじて眠そうにみえますが、どうかした拍子にカッと大きく見開かれると、青みがかった二つの瞳からは、射るような鋭い光りがひらめきでて、獲物をねらう黒豹のすさまじさをみせます。この眼光ににらみすえられると、鳥も獣も人間も、五体がすくんでうごけなくなってしまうといわれていました。

この妖しい力をもった男こそは、世間の良民たちから厄病神のようにおそれられている黒猫組の首魁で、婆羅門直伝（バラモン）の波羅蜜多（ハラミツタ）の妖術使い、黒猫九郎兵衛という、稀代の怪賊なのでした。

（第四回）

ここで言う眼光の怪しい力が発揮される機会が第七回「光る猫の眼の怪」にある。遠眼鏡を奪った陽

炎の銀二郎と、木鼠の忠市は、遠眼鏡越しに九郎兵衛の眼力を感じ、意識を失ってしまう。九郎兵衛は遠眼鏡を奪い返すのである。この眼力が「切支丹の妖術」なのか、「婆羅門」伝来の「波羅蜜多」の術なのかは不明。忍術ではなさそうであるが。

九郎兵衛の変化の術は、第十九回「南蛮手品の舞台」から第二十回「手品小屋大騒動」にかけて再び使用される。天々斎天瑪理を攫おうとした黒猫組の配下の者たちは、天瑪理の含み針によって近づけない。その時、黒猫が現れる。

どこからかなまぐさい風がドッと吹いてきたと思うと、この南蛮手品の大きな掛け小屋が、ゆらゆらと揺れ動いて、舞台の奥から、絵に描いた猛虎とも見まごう様な、まっ黒な大猫が一ぴき、白い牙をむき両眼を炬のようにひらめかしながら、のっそりとはい出してきました。

天瑪理が含み針を吹くも、「目に見えぬ石の壁にでもあたったみたいにバラバラッと跳ねかえされて」しまう。黒猫は天瑪理の帯を咥え、連れ去ろうとする。それを見て、曼念と忠市が天瑪理を救おうと駆け付けるが、「ふたりとも、まるで、目に見えない壁のようなものにでも突きあたったように、たあいもなく、後へズデンとはねかえされ」てしまうのであった。これについては、「妖術によってその身のまわりを護るために張りめぐらした、術網という、目に見えぬ怪しい網のため」と解説されるのだ。ところが、この妖術が効果を現すのは人間のみであり、この時も忠市の飼っていた小猿が黒猫に襲いかかり、術が破れることになる。その後、怪力の曼念に捕まった九郎兵衛だが、「口の中で波羅蜜多の呪文を唱え、霞変隠形の妖術」を使い、消え失せてしまう。鳥獣（九郎兵衛の場合は黒猫）に変化するのみではなく、霞に変化し消え失せるという術を見せたのだ。

術網については、後述する雲霧仁左衛門も同様に、いや九郎兵衛よりもより強く使うことができる。仁左衛門が術網を使用した際には、

手についていた自然木の杖をあげて、大空にむかってなにかをさし招くようなかっこうをしてみせますと、ふしぎや、どこからともなく、霧のような、もやのような、雲のような、ある

いは、こい水蒸気のようにも思われる白い気体がわきおこり、ただよい流れてきて、やがてこのふたりの老幼の身辺をとりまき、渦巻のようにグルグルとまわっているうちに、だんだんにこくなり、不透明になってきて、やがては、一団の白雲となり、山頂の方へフワリフワリと風に流されるように動いていきました。（第三回）

という様子であり、また、その術網を受けた黒猫組の配下たちは、

「…山の尾根から、えたいのしれぬ霧みたいなものがスーッと舞いおりてきたとたん、急に手足がすくんじまって、夢にうなされた時のように、やたらおじけづいてきたんだが…」

「今にも大山崩れでもやってきそうな気持がして、足下（あしもと）の地面はグラグラゆれだす、とてもジッとしてる気にはなれなかったぜ」（第四回）

という状態になるものであった。そしてこれを九郎兵衛は、「…ありゃあ大した術力だ。今の世に、方術にしろ幻術にしろ、あれほどの力をもった術士は、そうめったにあるものじゃあない」（同）と、その術の優れていることを認める。推察すれば、何らかの力が網のようにある一定の範囲の働き、範囲の中にいる人間を不安にさせるといったところであろうか。九郎兵衛の術網は、見えない壁のようなものを生じさせるという力のようであるが、しかし人間にのみ効果を挙げるということは、やはり人間の心理に働きかけ、力があるように感じさせている術ということなのであろう。

物語終盤、第二十五回において、九郎兵衛は仁左衛門と術で戦うことになる。仁左衛門が術気を与えたむかでが九郎兵衛に噛みつく。九郎兵衛が雉に姿を変え、むかでを食べていったので、仁左衛門は荒鷲に姿を変え、雉と戦う。九郎兵衛は雉から柘榴に姿を変えると、仁左衛門は鷲から軍鶏に変わり、柘榴を食べる。柘榴の一粒が鼬に姿を変え、軍鶏に襲いかかる。軍鶏は犬に変身。すると鼬は大黒猫に変身、それに対し、犬は獅子に変身といった具合に術比べがなされ、獅子の勢いに術が敗れた九郎兵衛は、火焔に身を変え獅子に襲いかかるが、霧降丸の宝剣により火が消え、九郎兵衛は力が尽きてしまう。

術使いが術を争うというのも、江戸時代の読本や

草双紙に描かれた形である。結局、「婆羅門」伝来の「波羅蜜多」の妖術は、より強い術を使う雲霧仁左衛門の前に敗れることとなった。しかし、それならば、なおさら北極星と北斗七星の化身である八人の少年少女が集う必要が薄れてしまう。天縁の八人が集うことによってこそ、妖術が打ち破られるという展開を持たねばならなかったのではあるまいか。

九郎兵衛の目的は何であったか。黒猫組は山の洞窟に山塞を構え、盗賊をなしていた。しかし、「婆羅門」伝来の「波羅蜜多」の妖術を得たためか、大望を抱くようになっている。それは隠形変の術による、江戸城乗っ取りである。九郎兵衛は言う。

「ふむ、おれが天下をねらえば、由井正雪のようなへまはやらぬ。おれは婆羅門の波羅蜜多の法術によって、江戸城深く忍び入り、将軍めをさし殺しておいて、隠形変の術で将軍に化けるのだ。それから先は、幕府はおれの心のままだ。おまえたちも次々に、大名や旗本に立身させ、やがては大老も老中も、みんな黒猫組の一味が取ってかわるのだ…」（第二十五回）

「…まず、将軍の寝所へしのび込んで、ひと刺しに刺し殺し、死体を床下にうめておいて、隠形変によって将軍に化けすまし、夜があけると、そのまま表座所（おもてざしょ）へ出て行く。むろん、だれひとり、うたがうものがあるはずはない。こうして毎日、将軍らしく日をくらすうちに、おいおい、傍役（そばやく）のやつらを遠ざけて、黒猫組の子分の奴らと入れかえる。大老も老中も大目付も、むろん、みんな子分の奴らでかためてしまう。そうすればもう、日本の天下は、おれの思いのままだ。だが、山賊野盗としては腕ききの子分どもも、天下の大老職や老中などの役目が、うまくつとまりそうな奴はすくねえ。こいつがどうも気にかかる…」（同）

この発言から見ると、九郎兵衛は動物だけでなく、実際にいる人間そっくりに変化することができることになる。しかし、物語の中で一度もそのようなことを行っていないのであるから、これもまた欠点と言える。この変化が行えれば、かなり自由に他者を欺くことができるはずであり、黒猫組の強さは増したはずなのだ。また、将軍に化けるまではいいが、

その先、具体的にどう思いのままにするのかはまったく語られていない。そして、配下の者たちが政治の要職につくのを心配している。ここは、笑いどころなのだろうか。浅薄な考えを露呈している悪の大将である。

結局、九郎兵衛は仁左衛門との術争いに敗れ、そして千代太郎と剣で戦い、敗れる。敵討ちが成就されるわけである。これまた、江戸時代の読本、草双紙、実録といった文学ジャンルで数多く描かれた敵討ちの枠組みを踏襲しているのである。

三　老仙・雲霧仁左衛門

雲霧仁左衛門は、現代では池波正太郎の「鬼平犯科帳」に登場する盗賊とのイメージが強いのではなかろうか。しかし、もともとは江戸時代の実録「大岡政談」ものに登場する盗賊である。その仁左衛門を善の老仙人という位置に据えたのが、この作品の特徴の一つである。

仁左衛門を紹介するのは、今度は逆に悪の黒猫九郎兵衛たちによる。千代太郎を返り討ちにするため手下に襲わせたが、何者かによって千代太郎が連れ去られてしまう。九郎兵衛はその何者かを以下のように推測する（地の文で補足が入る）。

「…この日本国において、あれほどの術をつかいこなした者といえば、遠い昔の大伴皇子、安倍晴明、足利の世になって天竺徳兵衛、さらに近くは石川五右衛門、雲霧仁左衛門と、この五人よりほかにはないはずだ」（第四回）

「…石川五右衛門は、桃山城で仙石太兵衛に捕まって釜煎されたし、その師匠といわれて、ゆくえをくらました雲霧だって、いきてるとしたら、三百才を越してる勘定だぜ」

子分どもが口々にいうのを、黒猫九郎兵衛は、かすかに半眼をまたたかせて、キッパリといいきりました。

「いや、雲霧だ。雲霧仁左衛門にちがいないわ」

雲霧仁左衛門といえば、戦国乱世の時代に乱破者（忍術者）または野武士の棟梁として、天下にその名がなりひびいた大盗でした。盗賊といっても、不義非道な悪事はもとより、良民に

たいしては、塵(ちり)っぱ一つかすめず奪わず、弱者をたすけて強者をくじく、まことに一代の大義賊なのでした。

若いころ唐土(もろこし)にわかって異人にであい、その弟子となって修業をつみ、神仙の術だか、方術だか、とにかくふしぎな秘法を授かり、通力自在の身となったともいい伝えられているのでした。（同）

大岡政談の雲霧仁左衛門にも義賊的なところはあったが、せいぜい自分の悪事を自覚し、罰せられることを潔く受け入れる点や、また悪事を隠すために日常の生活では善人として振る舞っていた点（ただし、このように振る舞えるところが通常の悪人とは違うのである）が評価できる程度であった。もちろん時代は享保年間。この仁左衛門を、戦国時代の忍術者、野武士の棟梁として設定した。このあたりは、風魔の小太郎のイメージを重ね合わせたか。また、石川五右衛門の師匠と言えば、百地三太夫。石川五右衛門も江戸時代の実録の中で成長した人物像がある。忍術を習い、秀次の味方をし、秀吉から千鳥の香炉を盗もうとして捕まり、しかし秀吉を天下を盗んだ大悪人と面罵する、そうした人物である。実は師匠が百地三太夫の場合もあれば、そうでなく三太夫は俗人でその妻と密通するという場合もある。『怪奇黒猫組』では、仁左衛門を五右衛門の師匠に設定した。そして「いきてるとしたら、三百才を越してる勘定」として、現実離れをした超人とした。その理由を中国で秘法を習ったからとしたが、この事情は最後まで不明のまま。読者の前にも謎として残したのである。

仁左衛門は仙界に連れて行った千代太郎に対し、神仙の道は人間界の者に教えても学びうるものではないとして（それでは仁左衛門自身はどうだったのだ、というツッコミはなしにして）、剣の極意を教える。「先勝の気合」「飛剣」「春楊柳」「攫流星」「飛燕」「水月」「煙霞」「秋風関」の秘術を授け、また九郎兵衛の妖術に対抗するために、弟子の菊童を下山させる。また、千代太郎には『『飛剣』の真物」としての小剣、菊童には「無増無減球」という鉄丸を与える。しかし、その後、実際に使用され、効果を発揮したのは最後に授けられた「飛剣」と「無増無減球」だけであり、「飛燕」「水月」「煙霞」「秋風関」にいたってはどんな技なのかさえも説明されず、わからない

ままである。カッコつけて設定したはいいが、まったく生かされないままなのだ。

物語のクライマックスで、九郎兵衛との最後の対決の際、九郎兵衛の妖術に対抗してそれを破るのは、菊童ではなく、師匠の仁左衛門であった。また、敵討ちとして九郎兵衛を討ち果たすのは、確かに千代太郎ではあるのだが、「父祖の血を享け業を伝えられた上に、雲霧仁左衛門に就いて剣の奥義をさずけられた」という千代太郎が、

…飛燕のようにひらめきとんで、あざやかに相手の刀をかわすと同時に、目にもとまらず斬りかえした紫電の一剣は、たしかに手ごたえがあって、のび切っていた黒猫の胴体へ、食い入るようにすいつきました。（第二十六回）

とあるだけで、これが「飛燕」の技なのかもしれないが、結局は不明。技の名前を設定する意味があったのか疑問である。

第一節で述べたように、天縁の八人が集い、共闘するという設定は良い。対する悪の設定は、妖術の出所が曖昧ではあるが、それを除けば許容範囲内か。しかし、善側の後ろ盾たる存在である雲霧仁左衛門は、前に出過ぎであり、それがために八人の活躍が減り、八人の設定さえもぼやけてしまっている。残念ながら、これが『怪奇黒猫組』の欠点であろう。

とはいえ、怪しい妖術使いの黒猫組に対し、天縁の八人の少年少女が対抗するという設定そのものは、たいへん魅力溢れるものであり、だからこそ、漫画化や映像化がなされたのではないか。

補記

本稿は、二〇一一年度尾道大学芸術文化学部日本文学科、第11回「文学談話会」（二〇一二年二月一六日）において、発表したものをもとにまとめたものです。

注

（1）本稿のテキストは、尾道市立大学附属図書館所蔵の『怪奇黒猫組』（刊記破れにより、刊年不明。ポプラ社）による。引用にあたっては、振り仮名の多くを省略した。

（2）浜田啓介「家臣捃拾譚」（『日本文化論叢』所収。

二〇〇一年一一月。

（3）「千光寺」は、高垣眸の出身である尾道に存在する寺。尾道には、怪力で名を馳せた拳骨和尚こと物外が住職を務めた済法寺があるが、曼念の造形には物外の俤が読み取れる。高垣眸があえて千光寺としたのか、あるいは物外のいた寺を千光寺と勘違いしていたのかは不明。なお、高垣眸作『吹雪の夜話』（昭和二十四年三月『小学五年生』三月号ふろく。小学館）にも、「備後尾道千光寺」の「物外和尚」「拳骨和尚」が登場している。

―ふじさわ・たけし　日本文学科教授―